

PASS ILLIGAL

□ レイキヤビヲ Reyjaviik 星系、惑星 アキユレーリ Argureilly —— 山茶の部屋

「珍しいな、おまえがここに来るのは……。」

二つのグラスに、交互に酒を注ぎながら、つばき 山茶は、つぶやいた。

彼女を後目に、部屋の中をいろいろとあさっているのは、ヴァルア Valua である。

ヴァルアは、散らかり放題散らかっている山茶の部屋を、まるで探索するかのようになり、あちらこちらとろろろした。

彼女の寝室であるこの部屋は、一二畳程度の部屋で、彼女の家の南側に面している。日当たりは良好であった。一二畳の寝室と言えば充分過ぎるほどの広さだが、こう散らかっているのは、狭い……としか言いようがない。

「相変わらず、生活が荒んでいる……。」

ヴァルアは、落ちていたエロ本を取り上げると、パラパラとめくった。

「こんなモノを見て、楽しいのか？」

ヴァルアは、山茶の前で、二本を広げてみせた。

山茶は、顔を真っ赤にして、ヴァルアから本をひたたくると、自分の後方へと投げ飛ばし、ムツとなってヴァルアをにらんだ。

「何の用件で、来たんだよ？」

山茶は、少し気分を落ち着かせてから小さく言った。それでな

くても、昼寝中にいきなり訪ねてこられたのだ。

「右手を……。」

ヴァルアは、自分の左手を山茶の前に出すと、そうとだけ言った。山茶は、渋々といった感じで、右手を出す。二人の手が、ゆっくりと重なった。

「バチツッ！」

瞬間的に、エネルギーがヴァルアから山茶に移る。

「クッ！」

山茶が、瞬間的に顔をゆがめると、肩をすくめた。

何処かで感じたことのある感覚だ。

「これは？」

山茶は、訪ねる。

「猿が見つかったわ。いえ、エレア Elmere と言った方がいいのかしら？」

ヴァルアは、低い声で、淡々と語った。そして、小さなカードを山茶の胸に向かって放り投げる。照明の明かりを、キラリと反射したそれは、回転して山茶の手のひらに落ちた。

「つまり、今のはそのための力か……。」

カードを受け取りながら、山茶は、溜息混じりに応えた。

「始末を頼む。あの娘のためにも。」

ヴァルアは、まったく起伏のない調子で話す。

「この仕事も、俺の役目の一つなのか？」

どうせ答えてくれないことを承知で、山茶は、尋ねた。

「もちろんだ。あなたが私に会ったときから決められていた事だ。」

ヴァルアは、いつもと変わらない調子で応える。

そして軽く一礼すると、山茶に後ろを向け、彼女の部屋から出て行った。何の音もたてず、ヴァルアは、部屋を後にしていた。何も手をつけない、グラスを残して……。

山茶は、フンツと鼻を鳴らして、ヴァルアが出て行った扉を、しばらく眺めていた。それからふと、自分の手にある小さなカードを見つめた。

キャッシュ・カードの半分ほどの大きさのそれには、隅に小さく『BHAREM』という単語が金で彫られていた。

「ブラック・ハーレムか。アイツら、容赦ねーからなあ。」

ヴァルアからもらった真つ黒なカードを指先で遊びながら、山茶はそうつぶやいた。

それから、山茶はシャワーを浴びに、部屋を出た。

彼女が、部屋から出たとき、航宙戦艦クラスのエンジン音が轟いた。

山茶は、横目で、窓の方を見やる。

そこには、離陸中の真つ白な皇帝艦が、あった。

「ふん、相変わらず勝手なヤツだ……。」

天へ向かって小さくなっていく皇帝艦を目で追いながら、山茶は、そういった。

□ 恒星間シャトル——帝国首都行

小さな溜息をついて、山茶は窓際から外をのぞいた。あまり大きくない窓からは、真つ白な光が差し込んでいた。超光速航行中の空間を見たところで、たいして、面白くもない。

ハーレム達の住む惑星アキュレリーは、バルダーク帝国の最果

てにある。したがって、ここから帝国首都まで、通常のシャトルでは一年ぐらいかかってしまう。HAREM艦を使えば、一瞬で首都まで飛べるのだが……。

『民間船で行くの？』

『ああ。せっかくの休暇もかねてな……。』

『HAREM艦だと、すぐなのに……。』

『いいんだよ。この仕事は、遅ければ遅いほどいい。』

『はあ？』

『帝国軍の方は、鶴に任せたら……。』

アキュレリーの軌道ステーションで出会った娘達との会話を、山茶は思い出していた。

『そうだ。遅ければ遅いほどいい……。急げば、急ぐほど、不幸になる……。』

山茶は、頬杖をついて、そして溜息をついた。申し訳程度に設けられた、小さな窓から、そっと外を見る。矢のように流れる、高次元の光の間に小さく、またたく星があった。

□ バルダーク帝国首都——帝都 (MIYAKO) ——

—— 第一二軌道ステーション・スペースポートエリア

山茶は、重い足どりで、タラップから降り立った。

見慣れたいつもと変わらない風景と、空気が。彼女は、しばらく立ち止まってから、いつもの自分の職場がここにあることに気づいた。

人間の臭いがブンブンする中へ、彼女は足を踏み込む。

大理石を磨いたようなキレイな、床。明るい照明。うるさい、

アナウンス。世界は、変わりなく動いている。どのようなことがあっても、とりあえず、時間は流れていく。

山茶は、しばし感傷的になりながら、無意識に足を動かしていた。自分が向かう所は解っている。

所定の所に並んで、切符を買う。そこからすぐに、搭乗待合室へ足を向ける。

首都を経由して、地方民間航路へ。

人混みの中でもまれながら、目的の船へ足を運ぶ。

そして、他の人達と一緒に、タラップを渡る。

* * *

切り離される、たくさんのダクト。

次々とワイヤーが、宙に投げ出され、船体を固定していたモノが外される。

船体がゆっくりと動き出す。

何機かの警備機が、船を誘導し、長い光の尾を引いていた。

緑色の誘導光が、一直線に宇宙の暗闇に向かって伸びている。

山茶は、出港の一部始終を眺めていた。

時折、耳にしているラジオにノイズが混ざる。

出港作業だけで、すでに三〇分。大きな巨体を、ゆっくりとゆっくりと旋回させ、棧橋から船が離れていく。次第に小さくなる、軌道ステーション。残るのは、ステーションから発せられる無数の光点と、誘導光だけ。それも、超光速航行に入った途端に途切れてしまう。

あとは、お馴染みのつまらない風景だった。光の矢が、前から後ろへと流れていく。

□惑星 プラネター Planet —— 軌道ステーション第一棧橋

一時間という入港作業を終えた船から、タラップに足を踏み出す。約二週間の船旅。惑星軌道上ではあるが、地面をこうして足で踏みしめると、何となく安心感を憶える山茶だった。

自分の後ろにそびえる船体は、長時間の超光速航行のために、黒く薄汚れている。わずかではあるが、船のエンジンが、ゆらゆらとステーション内の空気を振動させていた。最低可聴周波数ギリギリの重低音が、山茶の身体をゆさぶる。

極めて人の少ない、ステーション。この星系が、あまり活発でない証拠だ。この惑星に、軌道ステーションはこれ一つしかないし、コロニーやドックなどの設備もない。もちろん、こんな惑星で降りる客もいなかった。

タラップに降りたのは、山茶一人だけだったのだ。

その一方、搭乗用タラップには、ほどほどの人間がいた。

人間ってなー、何処にでもいんだなあ……。

何処の星で降りても、人がいる。もつとも、人がいるから船はそこで泊まるわけなんだか……。

自分も人間だったクセに、今でも本質は大して人間と変わらないくせに、他人を見るのがいやになっている。自分が他人に較べてどれだけえらいってんだ……。

肩書きが、偉さにつながらない事を知っている彼女は、だいたここでこういう思考を止める。どうも最近、人間嫌いになりつつあると感じる彼女だった。もつとも、彼女がいつも相手にしているのは、油ののった金と権力にしか興味の無いジジイばかりな

のだが……。

「フン。ただ人を殺すだけなら、楽な仕事なんだが……。こんなことやらされんなら、始末書一〇〇枚書いた方がよっぽどいいぜ……。」

それから、自分の足元に広がる惑星ブレアーを見おろして彼女はそうつぶやいた。山茶が立つ透明なタイルの向こうには、蒼と緑の惑星がどっしりと横たわっていた。

□惑星ブレアー主都 *Revia*——喫茶店『かどくろ』

自分が行けばいい場所と、これから起こる事は全て解っている。メインストリートにあるこの喫茶店で、貉は恋人と待ち合わせをしている。今は午前一時五〇分。彼女達は一二時の待ち合わせだが、男の方は一〇分は遅れてくる。なぜなら彼の車は今渋滞に巻き込まれているからだ。

その間に、隣のビルの地下駐車場で、ケリをつける。

山茶の頭には、目的を達成するための全てのデータが入っていた。これらは、長年つちかかった経験と常人をはるかに超えた彼女の脳が瞬時にして行う。彼女は、誰が何処で何をしているか、瞬時に解る事ができる。これらは全て、自分をこのようにしたヴァルアなる人物から全て送られてくるデータである。

「俺はサイボーグかってんだ……。」

山茶は、いつもその台詞を仕事を始める前につぶやく。今回もそうだ。自分の視界の中で、無邪気にクレールを頬張る一六、七歳ぐらいの娘を見ながら、山茶はそうつぶやいたのだ。

『サイボーグか。サイボーグだったら、こんな仕事も難なくこな

せるのかもな……。』

それから自分の手を見つめて山茶はそう思った。

彼女は、部屋の隅でB3サイズの雑誌を広げているので、貉が彼女を発見する事はできない。

山茶は、貉と出会ったときの事を思い出す。

大破したビルのコンクリの壁によりかかり、膝をかかえ雨にうたれている小さな女の子を見つけたのは、山茶がこの星の戦後処理をしていたときだった。鶴とともに、残党どもを駆り出している真つ最中だ。山茶は、震えるその女の子の目の前で、その子の両親を、八つ裂きにしたのだった。

分間、二四〇発という弾丸が、レジスタンスどもの身体をミンチにする。

雨にうたれる女の子の目に、涙はなかった。ただ、山茶を一心に見つめていた。山茶が近づいても逃げもせず、叫びもせず、泣きもせず……。

「あれ、あたしのパパとママよ……。」

ただ、もとの形がなかったのか解らなくなった肉の塊を指さしてそう言ったのだ。小さい八歳の女の子だった……。

あのとき、自分の目を見つめた女の子の瞳を山茶は忘れられなかった。あのあと、身寄りのないこの子を拾って、一七歳まで育てて、ハーレム入りさせたのだ。

午後一二時ジャスト。山茶は、雑誌をたたむと椅子から立ち上がり、歩きだした。

そして、ゆっくりと目標の前に立って声をかける。

「よお……。」

低くて愛想のない、しゃがれた声。

そのあとに続く、スプーンを落とす音。

「猪は、グツと口を閉じて、山茶を見上げた。あの眼だ……。」

「俺がここにきた理由は、解っているな？」

山茶は、低い声で喋り続けた。

猪は、ゆっくりと、深く頷いた。

「これから、どうなるかも、解っているな？」

山茶は、猪の眼を見てさらにそう言った。

猪は、もう一度頷く。

「さ、行こう。俺は、長くおまえとは会っていたくない……。」

山茶は彼女の前に右手を出した。

猪は、ゆっくり立ち上がった。彼女の手が、微妙に震えている

のが解る。落としたスプーンを拾い上げると、山茶の前に立った。

二人が、店から出ようとした時、待ち合わせの相手が喫茶店に

駆け込んできた。無論、彼はレジの前にいる二人を見つめる。

「ご、ゴメン遅れて。怒ったのか？」

会計を済ませようとしているのを見て、彼は非常にあわてた。

今は、午後一二時〇三分。渋滞は思ったよりもひどくなかった

ようである。

「う、ううん、ゴメン、そんな事ないの……。ちょっと用ができ

ちゃって……。」

あわてて、猪が弁解する。

「えと、じゃ映画別の日にしようか……？」

二人ともあわてていて、どうも論旨が話せないでいる。

「いいの、すぐ終わるから。ちょっと待っていてくれる……？ あ

の、こちら山茶さん。私の小さい頃からの幼なじみで……。」

猪は、大きく息を吸うとそう言って、山茶を紹介する。

彼女の声は震えていて、アクセントもおかしかった。

「ああ、君が小さい頃預けてもらったっていう近所のお姉さ

ん?! 初めまして、オレ、エレアの恋人のダンっていいます。

ダン・ベディール。」

ダンは、山茶に右手を差し出した。

「初めまして。」

薄い笑みを浮かべて、山茶は彼と握手をかわす。

「あたし、あのテーブルだから。ほら、食べかけのクレープとパ

フェのある……。すぐ戻るから……。」

猪は、アせる手で自分が座っていた席をさしてそういった。ち

ぐはぐした口調ではあるが、ちゃんと言葉になっている。

「解った。待ってるよ。」

彼は、ニッコリ笑うと、手を軽く振って、そちらの方へ歩いて

いく。

「会計はあとでまとめてやるよ。」

レジの前で、キョトンとしていたウェイトレスに山茶はそうい

うと、猪を小突いた。猪は、ビクツと身体を硬直させたが、大き

く息を吐くと店から出た。そのあとを山茶がゆっくりとした歩調

でついていく。

□ブレアー総合商社本社ビル地下駐車場

光の当たらない地下駐車場は、闇仕事をするにはもってこいの

シチュエーションだ。ダンツと山茶は猪をコンクリの壁に押し付

けると、彼女の肩に手をかけた。

「山茶、肩が痛いよ。」

弱々しい声で、狼は山茶を見上げる。

山茶は黙ったままだ。

何も応えてくれない山茶から視線を外すと、狼はじつと地面を見た。向こうが、能動的に動いてくれないと、自分の置き場に困ってしまう。なぜなら、今の自分には逃げ出す力も、気力もないからだだった。

しばらくの沈黙が続いた。

二人の後ろを、何台かの車が通り過ぎる。

六台目のヘッドライトがはるか後方に消えたとき、山茶が沈黙を破った。

「俺は……。おまえを悪い方にしか導かなかったな……。今の俺は、おまえの心を解る事はできないが、俺がおまえだったら悔しくて悔しくて……。」

狼の肩を強くつかむ山茶の大きな手が、震えている。

「あたしのパパとママは、あるとき山茶がいなくても殺されていきました。そして、あたしも殺されたでしょう。山茶は、あたしの二番目のママなんですよ……。何が悔しいんです？ 一〇年間あたしを育てた、れっきとした母親なんです。」

キッと山茶の方を向いて彼女は話した。

彼女の台詞の向こうに、山茶は自分自身を見つけたような気がした。彼女は、山茶よりも……大人だ。山茶にはそう思えた。

「何か、言い残す事はないか？」

彼女の肩から手を放し、山茶は低い声で、ささやくようにそういった。

「最後に、あなたの胸で泣かせて下さい。五分間だけ。それから、母親の口づけが欲しいです。あたしのママは、国を取り戻す事し

か考えていませんでしたから……。」

山茶の目に焦点を合わせ、狼は応える。

「俺も、戦争と殺戮と裏切りの中でしか生きられない女だ。」

山茶は、悲しそうな表情になって、狼から視線を外らす。

「でも、ママよりも多くあたしを抱いてくれました。」

そっぽを向いてしまった山茶に、狼はつめよった。

「わかった……。よ。」

山茶は、ボソッと答える。

狼が、無邪気に、そして何の曇りもない笑みを見せた。

それから、山茶の胸に顔をうずめた。

山茶は、そっと彼女を抱きしめる。

すすり泣いているのだろうか？ それともただ涙を流しているだけなのだろうか？ 自分の胸で、腕の中で、静かに泣き続ける少女を想いながら山茶はふとそんな事を考えていた。

声も出さず、ただ自分の胸元で震えている。

少女をこうさせてしまったのは、他ならぬ自分であるのに。五分後が永遠にこなければいいと、山茶は思った。もし自分が、ヴァルアほどの能力を持っていれば……。

「五分だ。」

山茶はきっかり五分後に、そういった。

ゆっくりと狼が顔を起こす。

「あたしが消えても、山茶はあたしの事、知っていてくれるの？ ヴァルアは、あたしの事知っていてくれるの？」

狼は、うつむいたままそう山茶に訊ねる。

「俺とヴァルアは、おまえの事を忘れない。そして……。」

山茶はそこまでいいかけると、いつの間にか握っていたナイフ

で、貉の髪の毛を切った。

「この髪が、お前がこの世界にいたことを証明してくれる……。」

そして、切りとった彼女のブラウンの髪の毛を束ねてみせた。

「それだけ残ってれば、充分です。」

最後に一言だけ、貉はそういうと、目を閉じた。

山茶の濁いた唇と、貉の涙で濡れたやわらかい唇が、重なる。

それから、数十秒後、貉の身体が消えた。まるで、最初からそこにいなかったかのように……。いや、彼女は過去にも、これから先にも、存在しなかったのだ。

□惑星ブレアー首都——メインストリート

ガラス張りの喫茶店、『かどろろ』の前を山茶は歩いていた。

非常に重い足どりだった。ふと、喫茶店の中の、貉が座っていたはずのテーブルを見つめた。

そこに、彼女が食べ残したパフェとクレープはなかった。彼女の彼氏と名乗った、ダンという少年が、雑誌を片手にジュースをのんでいる。彼も、山茶をのぞくハーレムの連中も、そして山茶が殺した貉の両親さえも、貉を知らない。そう、世界は変わったのだ。この世界に、貉は存在しなかった。生まれてこなかった。山茶は、自分の手の中にあるブラウンの髪の毛を見つめた。そ

れから、それを上にかざした。

やわらかく、さわやかな風が、貉の髪の毛を、天空に舞いあげる。本来、この世界に存在しないはずの原子である。いや、存在したとしても、別の物質になっているはずの、原子である。

『貉がこの世界にいた事を知らせるために、世界に散らばれ……。』

山茶は、心の中ではあるが、そうつぶやいた。そして、最後の一本が、彼女の手のひらから離れたとき、彼女は貉に別れを告げた。

「じゃあな……。」

重い足を、ステーションへ向けて山茶は、踏みだした。

己と誘惑に負け、使命を捨てて、ハーレムから抜け出した娘達の数、約三六名。そうして、抜けていったハーレムに待つ運命は、死ではない。この世界そのものからの抹消である。生まれてもこなかったし、創造もされなかった。つまり、この世界に始めから存在しなかった者とされる。

それでも……それを知っておきながら、ハーレムからは三六人が抜け出している。貉もその一人だ。

「あと、一二人か……。」

帝国首都行きのタラップを上りながら、山茶はそうつぶやく。山茶が、さらにもう一度この惑星の土を踏みしめる事はないだろう。